

「洗礼者ヨハネの殉教」

2022年01月19日

なぜなら、ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである。(マルコ福音書6章20節)

そこで、王はすぐに衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って来るように命じた。衛兵は出て行き、牢の中でヨハネの首をはね、盆に載せて持って来て少女に与え、少女はそれを母親に渡した。(マルコ福音書6章27節～28節)

主イエスの「神の国」の宣教は、人々に知れ渡っていった。人々は、主イエスの働きに感動し、洗礼者ヨハネが死者の中から生き返り、あのような力が働いていると言った。他の人々は、「彼はエリヤだ」と言い、また、「昔の預言者の一人のようだ」と、最上級の賛辞で褒め称えた。ガリラヤの領主ヘロデの耳にも、主イエスの噂が入り、彼は「私が首をはねたあのヨハネが生き返ったのだ」と言い、主イエスの働きに恐れを感じていた。ここから、ヨハネの殉教の次第が綴られている。

ヨハネは祭司の一人息子であったから、神殿に仕える祭司になる教育を受けただろうが、神殿を捨て、イスラエル人の宗教の原点である荒れ野に立った。らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、預言者エリヤの出で立ちで、悔い改めの洗礼を宣傳えた。人々は、ヨハネの気迫のこもった宣教に心打たれ、続々と洗礼を受け、大きな宗教運動に広がった。

そのヨハネは、領主ヘロデが兄弟フィリポの妻ヘロディアと結婚したことに対し、レビ記18章16節に、「あなたの兄弟の妻を犯してはならない。それはあなたの兄弟を辱めることである」の律法から、「兄弟の妻をめとることは許されない」と抗議した。律法に忠実に生きるヨハネは、ヘロデの罪を率直に弾劾した。ヘロデは、一介の野にあるラビの抗議を怒り、ヨハネを獄に繋いだ。ヘロデの妻になることを望んでいたヘロディアは、ヨハネを恨み、殺そうと思っていたが、できないでいた。それは、「ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである。」ヨハネの教えは罪を告発され、息苦しいけれども、真実な言葉ゆえに、心の内では喜んで聞かざるを得ないようなものであった。

ところが、ヘロディアにとって良い機会が訪れた。夫ヘロデの誕生日に、重臣や将校、ガリラヤの有力者たちを招き、祝宴が催された。その宴席に、ヘロディアの連れ子の娘が入って来て踊りを踊り、ヘロデと客たちを喜ばせた。ヘロデは少女に「欲しいものがあれば、何でも言いなさい。お前にやろう」、更に「お前が願うなら、私の国の半分でもやろう」と上機嫌であった。少女は母親に「何を願いましょうか」と問うと、「洗礼者ヨハネの首を」と答えた。少女はヘロデに、「今すぐ、洗礼者ヨハネの首を盆に載せていただきとうございます」と願った。ヘロデは心を痛めたが、列席者の前で、大見えを切ったので、少女の願いを退けることができなかった。衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って来るように命じた。牢の中で首をはね、盆に載せて持って来て、少女に渡した。少女はそれを、母ヘロディアに渡した。ヨハネは無残な殉教を遂げたが、それは、宴席の他愛のない余興がもたらしたものであった。ヨハネの弟子たちは師の死を悲しみ、遺体を引き取り、墓に納めた。ヨハネの激しく一途な神信仰と、権力を恐れず、齒に衣着せぬ真実な言葉は、人々の尊敬と敬意を集めた。そして、殉教後も長く、ヨハネへの人気は高められていった。